

コロナ禍における法文学部の 被災記録の収集と保存Ⅲ

— 2020年度学生手記の分析 —

青木 理奈・鈴木 静・福井 秀樹
小佐井良太・石坂 晋哉

1. はじめに

新型コロナウイルスの感染拡大は、大学生にどのような影響をもたらしているのだろうか。新型コロナウイルス感染蔓延は、多くの人にとって予期しえなかった深刻かつ長期にわたる未曾有の災厄である。愛媛大学も、急速に進む感染拡大に対し、学生の入構禁止、遠隔授業への全面切り替え等が急きょ行われ、教育提供体制が激変した。

今回の新型コロナウイルスのような全世界規模で起きている災厄は、記録や教訓を収集、保存し、継承していくことが次なる災厄への備えになるだろう。なにより、今のコロナ禍において刻一刻と事態が変わっていく中、時系列で保存できるよう、記録はコロナ禍の初期から収集することが重要であると考えている。

よって、本プロジェクトは、未曾有の事態に際し、法文学部学生の生活上の被害実態を明らかにするとともに、法文学部の緊急時対応および遠隔授業等実施に係る記録を収集し、データベース化することを最終目的とする。これまで、愛媛大学法文学部の学生を対象としたアンケートを実施¹⁾している。

本調査では、学生たちの生の声を聞くため、手記を収集し分析することによって、コロナ禍における大学生の実態を探求し、学修状況や生活状況を理解することを目的とする。そして、手記ならではの細かな記載を研究ノートとして一部抜粋し、書き留

1) 青木理奈・鈴木静・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅰ—学生を対象としたアンケート調査の単純集計結果—」愛媛大学法文学部論集第50号（社会科学編）,pp37-68.2021.2月

めておくことで、コロナ禍第一波および第二波²⁾の貴重な記録として保存することにした。

2. 対象と方法

2020年10月29日～11月30日の間、愛媛大学法文学部の学生を対象に、「コロナ禍における法文学部学生の学修・生活への影響について」手記を募集し、18件集まった。具体的には、「コロナ禍での大学生活や日常生活を1,200字程度にまとめてください。」と依頼した。

2-1. 対象者の属性

対象者の属性³⁾は、以下の表に示すとおりである。

ID	性別	学年	コース	昼夜間主の別
1	女性	2回生	法政	昼間主
2	女性	2回生	法政	夜間主
3	男性	2回生	G S	昼間主
4	男性	2回生	人文	昼間主
5	女性	4回生以上	人文	昼間主
6	女性	3回生	法政	昼間主
7	男性	1回生		夜間主
8	女性	1回生		夜間主
9	女性	4回生以上	人文	昼間主
10	女性	1回生		昼間主
11	女性	1回生		昼間主
12	女性	1回生		昼間主
13	男性	1回生		昼間主
14	女性	2回生	法政	昼間主
15	女性	1回生		昼間主
16	女性	2回生	G S	昼間主
17	女性	3回生	人文	夜間主
18	女性	3回生	人文	昼間主

2) 第一波：2020年3月～5月頃、第二波：2020年7月～8月頃

3) 愛媛大学法文学部は、昼間主・夜間主コースがある。更に、2回生からは、3つの所属コース（法学・政策学履修コース [法政]、人文学履修コース [人文]、グローバル・スタディーズ履修コース [GS]）に分かれる。

なお、手記を提供した2020年11月段階では、1回生は所属コースの振り分けは行われていない。

2-2. 分析方法

手記の分析を行うにあたっては、基本的にクリッペンドルフの内容分析手法（クリッペンドルフ、1989）を用いた。また、この分析手法を用いた学生のレポート分析に関する先行研究、森・大橋（2008）に多くの示唆を得ている。具体的には、以下の手順により分析を行った。

- 1) 手記内容を文脈毎に全て抽出する
- 2) 文脈の内容により記録単位を作成する⁴⁾（抽出した文脈をまとめる）
- 3) 類似性のある記録単位に基づき、サブカテゴリー名を付ける
- 4) 同様の作業（類似するサブカテゴリーの集約）をし、カテゴリー名を付ける

3. 倫理的配慮

調査対象者の学生には、研究の趣旨について書面による説明を行い、最終的に研究への協力を承諾した計18名から手記を提出してもらった。プライバシーの保護のため個人名は特定できないようにしている。

4. 結果の概要

テキスト化された手記を文脈毎にまとめ、それら文脈内容により記録単位を作成した結果、記録単位数は356件になった。

その後、文脈内容の類似性に従って分類した結果、11個のカテゴリーに分類された（表1）。友人関係に関しては、大学が遠隔授業になり通学できなくなったことによる影響を記述している場合と、緊急事態宣言下で外出の自粛が求められたことによる影響を記述している場合とに分けた。これら11カテゴリーを類似性に基づいて3つのコアカテゴリーに分類し、それぞれ、「大学生活」、「日常生活」、「その他」とした。

4) 記録単位とは、文脈毎に抽出した文章をさらにまとめたものである。例）「授業形態が変わり、大学に行く機会がなくなった。」という文脈は、「通学頻度の減少」という記録単位とした。

表1 類似する記録単位から分類した11カテゴリー N=356件

コアカテゴリー		カテゴリー	
大学生生活	183	1. 遠隔授業	151
		2. 友人関係	22
		3. サークル	10
日常生活	126	4. 行動面	55
		5. 経済面	27
		6. 体調面	21
		7. 友人関係	12
		8. 家族関係	11
その他	47	9. 学生の気持ち	24
		10. インターンシップ・就活	18
		11. 留学	5

以下、コアカテゴリーごとに分析していく。

1) 「大学生生活」に関する内容分析

表2 「大学生生活」に関する内容分析結果 N=183件

カテゴリー	サブカテゴリー	類似記録単位群		
遠隔授業	デメリット	79	A 課題負担が大きく、締め切りに間に合わない	7
			B 時間が自由に使えない、スケジュールの自己管理が難しい	16
			C 環境・必需品に不備が出る	10
			D 授業の質が低い、理解がしにくい、集中力が続かず学習している実感がない	32
			E 周りに頼れない、精神的負担がある	14
	学生の気持ち	23	A 不安と期待、戸惑い、衝撃、困った、残念、辛い、複雑	16
			B 対面希望	4
			C ありがたみを知る	2
			D 非同期型希望	1
	メリット	22	A 時間、場所が自由になった、負担が減った、効率がいい	13
			B 理解度が上がった、学習時間の増加、内容がいい	11
	現実に対する記述	20	A 授業形式が先生によって様々で、工夫が必要だった、チャットを使った	11
			B すべて遠隔、非同期型になり通学頻度が減った	7
			C 不都合がなく進んだ	3
	徐々に改善された点	4	A 授業の質が上がった	3
			B 課題負担が減った	1

友人関係	22	接触減少	8	A 友人は地元へ帰った	1
				B 授業前後で話さなくなり、友人との関係が遠くなった	2
				C 友人と会えないのでグループ会話やゲームをした	1
				D 先輩、留学生、同回生と会えず関係が築けない	4
		友人が作れない	7	A 友人が作れず不安で焦っている	3
				B 遠隔の間は友人が作れず、諦めている	4
		友人作れた	1	A 後期の対面で作れた	1
		学生の気持ち・心情	6	A なかなか会うことができず残念、後悔	3
			B 会う機会があって安心、楽しい	2	
			C 友人作りには個人差がある	1	
サークル	10	参加できず	5	A 交流がなくなった	2
				B 精神的ショック、残念	1
				C 実際に行かないと分からない	2
		学生の気持ち	4	A 対面でない強みがある、頑張りたい	2
				B 夕食と時間が被って辛い	1
			C まとめた情報を上げてほしい	1	
	参加した	1	A オンライン新歓	1	

「大学生生活」に関しては、3個のカテゴリーと12個のサブカテゴリーに分類された。このうち、カテゴリーについては類似記録単位の多い順に「遠隔授業（151件）」、「友人関係（22件）」、「サークル（10件）」だった。

「遠隔授業（151件）」のサブカテゴリーの内訳は、「デメリット（79件）」、「学生の気持ち（23件）」、「メリット（22件）」、「現実に対する記述（20件）」、「徐々に改善された点（4件）」であった。類似する記録単位で最も多かった「授業の質が低い、理解がしにくい、集中力が続かず学習している実感がない（32件）」をはじめ、「時間が自由に使えない、スケジュールの自己管理が難しい（16件）」、「不安と期待、戸惑い、衝撃、困った、残念、辛い、複雑（16件）」と続き、遠隔授業に関して否定的な記述が上位を占めた。

「友人関係（22件）」のサブカテゴリーの内訳は、「接触減少（8件）」、「友人が作れない（7件）」、「友人作れた（1件）」、「学生の気持ち・心情（6件）」であった。類似する記録単位で最も多かった「先輩、留学生、同回生と会えず関係が築けない（4件）」、「遠隔の間は友人が作れず、諦めている（4件）」とも否定的な記載であり、通学しない中で友人を作る難しさや、コロナ禍以前からの友人とも関係が遠くなる現実が書かれていた。

「サークル（10件）」のサブカテゴリーの内訳は、「参加できず（5件）」、「学生の気持ち（4件）」、「参加した（1件）」であった。最も多かった類似する記録単位は「交流

がなくなった (2件)、「実際に行かないと分からない (2件)」、「対面でない強みがある、頑張りたい (2件)」だった。

2) 「日常生活」に関する内容分析

表3 「日常生活」に関する内容分析結果 N=126

カテゴリー	サブカテゴリー		類似記録単位群	
行動面	外出自粛	13	A 守って家で過ごしていた	5
			B イベントが中止になった、キャンセルした	8
	変化あり	22	A 感染対策をするようになる	9
			B 実家に帰省、アルバイトを始めるなどの生活の仕方が変わった	13
	メリット	8	A 生活リズムが良くなった	4
			B 趣味など生活が豊かになった	4
	デメリット	5	A 頼れる人がいない、一人	3
			B 気を遣う、落ち着かない生活	2
	学生の気持ち	7	A コロナ前の生活への期待	4
			B 負担がある、緊張、退屈	3
経済面	27	22	A 収入が減り、生活が苦しくなった (影響あり)	21
			B 途中でアルバイトが復活し、収入増加	1
	5	5	A 仕送りやアルバイトあり、収入変わらず (影響なし)	5
体調面	21	17	A 精神的に病むようになる	11
			B 生活習慣の乱れ、コロナ生活による不調	6
	2	2	A 特に変わらない	2
			A 精神的に安定、暮らしやすい	2
友人関係	12	3	A 会う人がいない、限られた人としか会わない	3
			A 断って後悔、会うことに神経質に、価値観の違い	4
	8	3	B 会う機会があると嬉しい	3
			C 交友関係を広げたい	1
1	1	A おかずを友人におすそ分けした	1	
家族関係	11	2	A 実家に帰省できなかった	2
			A おうち時間が充実していた、成長できた	7
	2	1	A 外出を止めた親を恨む	1
			B 感謝している	1

「日常生活」に関しては、5個のカテゴリーと16個のサブカテゴリーに分類された。類似記録単位の多い順に「行動面 (55件)」、「経済面 (27件)」、「体調面 (21件)」、「友人関係 (12件)」、「家族関係 (11件)」だった。

「行動面 (55件)」のサブカテゴリーでは、「変化あり (22件)」、「外出自粛 (13件)」、「メリット (8件)」、「学生の気持ち (7件)」、「デメリット (5件)」であった。最も多

かった類似する記録単位は「実家に帰省、アルバイトを始めるなどの生活の仕方が変わった（13件）」であり、対面授業がないため、実家に帰省したり、教室に通ったり、アルバイトを始めたという記述が目立った。

「経済面（27件）」のサブカテゴリーの内訳は、「影響あり（22件）」、「影響なし（5件）」であり、最も多かった類似する記録単位は「収入が減り、生活が苦しくなった（21件）」という記述であった。

「体調面（21件）」のサブカテゴリーの内訳は、「不調（17件）」、「影響なし（2件）」、「安定した（2件）」であり、最も多かった類似する記録単位は「精神的に病むようになる（11件）」で、次いで「生活習慣の乱れ、コロナ生活による不調（6件）」と、昼夜逆転になり生活が乱れ、精神的にも辛くなってきたという記述が目立った。

「友人関係（12件）」のサブカテゴリーの内訳は、「学生の気持ち（8件）」、「接触減少（3件）」、「接触増加（1件）」であり、最も多かった類似する記録単位は「断って後悔、会うことに神経質に、価値観の違い（4件）」だった。コロナ禍で会おうと誘う友人を断ったことでの後悔や、外出したことを SNS に投稿したことで友人に注意されたり、コロナ禍を軽んじる友人の発言に対して耳を疑ってしまったたり、友人との価値観の違いによって否定的な気持ちが生まれたようだ。

「家族関係（11件）」のサブカテゴリーの内訳は、「コミュニケーション増加（7件）」、「接触減少（2件）」、「学生の気持ち（2件）」であり、最も多かった類似する記録単位は「おうち時間が充実していた、成長できた（7件）」であった。主に自宅生や帰省した学生で、家族との接触が増えたことをメリットと捉える内容だった。

3) 「その他」に関する内容分析

表4 「その他」に関する内容分析結果 N=47

カテゴリー	サブカテゴリー	類似記録単位群			
学生の気持ち	24	今後の抱負	7	A 自分の将来に向かって準備したい	7
		メリット	7	A 生活で得るものがあつた	7
		デメリット	10	A 生活に不安、心配がある	7
				B 他人と比較したり、キャラが分からなくなる	3
インターンシップ・就活	18	影響あり	13	A 中止、オンラインになった	5
				B 進路を変更した	2
				C 交通費不要、視野が広がるメリットもあつた	6
	学生の気持ち	5	A 対面で行いたかつた	1	
			B 早めに行動することが大切	1	
C 形式が変わって不安があつた			3		
留学	5	中止になつた	5	A 長期休みに行こうとしていたのに残念	4
				B 別の留学に行こうか迷っている	1

「その他」に関しては、3個のカテゴリーと6個のサブカテゴリーに分類された。類似記録単位の多い順に「学生の気持ち (24件)」、「インターンシップ・就職活動 (18件)」、「留学 (5件)」だった。

「学生の気持ち (24件)」のサブカテゴリーの内訳は、「デメリット (10件)」、「メリット (7件)」、「今後の抱負 (7件)」であり、最も多かった類似する記録単位は「生活に不安、心配がある (7件)」、「生活で得るものがあった (7件)」、「自分の将来に向かって準備したい (7件)」であり、必ずしも否定的な記述ではなかった。

「インターンシップ・就活 (18件)」のサブカテゴリーの内訳は、「影響あり (13件)」、「学生の気持ち (5件)」であり、最も多かった類似する記録単位は「交通費不要、視野が広がるメリットもあった (6件)」であった。

「留学 (5件)」のサブカテゴリーの内訳は、「中止になった (5件)」であり、最も多かった類似する記録単位は「長期休みに行こうとしていたのに残念 (4件)」とする記述で、仕方がないと思う反面、悲しい気持ちになったり、目標がなくなった今、留学の代わりとなる学修を探している様子が記述されていた。

5. 分析と考察

今回の手記で、類似する記録単位数が最も多かったのは、「大学生活」コアカテゴリー中の「遠隔授業」カテゴリー (159件) であった。むしろ、遠隔授業のことについて触れていない学生はいなかった。そのくらい大学生にとって遠隔授業は、大きな出来事だったのでだろう。

2020年度は、大学の講義のほとんどをオンライン (遠隔授業) で行うという、歴史上にも残る新しい形式での授業となり、教職員も学生も初めての授業形態に戸惑う一年となった。

1) 大学生活に関する内容分析

今回の手記では、「遠隔授業」は、学生自身の捉え方についての側面と、授業を行う教員への不満や改善を求める側面についての意見がみられた。学生自身、これまでの経験のなかで初めての授業形態に慣れるまで、ストレスを感じるが多かったようで、パソコンに向かって一人で取り組む授業形態は、学習効果が低いと感じた記述が目立ち、集中力が続かないとの記述も見られた (32件)。例えば、以下のような記述が見られた。

前学期を遠隔授業で過ごし個人的には対面授業より遠隔授業のほうが大変でした。

理由は三つあります。一つは、授業内容がしっかりと身に付いていないことです。パソコン等、画面越しのため動画であったとしても理解が半減してしまいました。また、質問や分からなかったことがあった時にその場で聞いて解決するということができませんでした。二つ目は、授業によって違う授業形態になじむのに時間がかかってしまったことです。先生によってリアルタイム型や、ムードルのテスト、メールによるレポートの提出など様々だったため、気づいたら期限を過ぎていたり、宛て先を間違えるというミスを何度か犯しました。三つ目は、やる気が出ないということです。遠隔授業は家ででもどこでも受けることができるため、特に zoom などのリアルタイム型でも直前まで睡眠をとり脳がうまく働かなかつたり、特に非同期型のオンデマンド形式だと課題は締め切り直前にすることがほとんどになりました。(ID6)

私には授業そのものも実際に対面で受けるよりも授業の内容を理解しづらいように感じました。ただ教員がレジュメや教科書に沿って説明している内容を私たちが一方的に聞いているだけなので、対面授業の時のようにその場の空気感で先生が説明の仕方を変えてくれたり、詳しく話したりといったことができず、機械的な印象を受けました。また、集中力も続かなくなりました。そのため、授業を受けた後も、自分が学習しているという感覚があまり感じられず、微妙な感覚のまま、また課題に取り組むという繰り返しで全てにおいてフワフワしているというが、自分の中に何か残ったのかどうかが不安に感じました。(ID1)

授業を行う教員に対しての不満や改善を求める記述も、多くみられた。教員によって、授業形態や教材の提供の仕方、課題の提出方法や期限などもそれぞれであり、学生にとっては「質が低い」と感じる授業がある(32件)一方、課題の提出方法や期限などは統一性を持たせてほしい等(11件)の不満等が見られた。

また、遠隔授業のために直接質問できないことや、個別のサポート体制の乏しさに不満が見られた。

先生によって授業や授業形態の質が本当にピンからキリだと感じます。生徒からのコメントをたくさん取り上げて議論や雑談を展開してくださる先生がいれば、とても簡素な pdf だけの授業にとても難易度の高い課題を課す先生、授業の動画公開から次の日の昼にはもう課題提出を締め切ってしまう先生、実際の授業の曜日とは違う曜日に授業を公開して課題を出す先生もいます。

……

先生と生徒はメールでしか繋がることができないのに対応が雑だと感じることも、融通が利かなさすぎると感じることもあります。もっと丁寧なサポートを望みます。先生同士の連携がとれていなくて同じ課題を二回する羽目になったこともありました。正直これらの授業のためになぜ学費を払っているのかと思うと虚しくなります。(ID12)

手記で興味深いのは、学生は、前期よりも後期に授業の質が向上したと感じていることである（3件）。特に2020年度前期は、授業を提供した教員も初めての授業形態に戸惑っていた。学びの質向上については、その後、教職員での情報交換や研修等によって、改善した授業も多くあり、後期の授業については好意的な意見が見られた。

後期になって、遠隔授業の質が向上したように感じている。私のとる授業が、文学系から法学系に変わったこともあるかもしれないが、資料だけの授業から、資料プラス先生が喋っている動画という授業が多くなった。喋りがあった方が、言いたいことも伝わりやすいし、授業や先生の雰囲気分かる。また、フィードバックをくださったり、同じ授業をとっている人の意見をまとめてくださったりする授業も増えた。そのことがすごくありがたい。(ID10)

また、少数意見ではあるが、遠隔授業を通じ、単位取得と専門科目を学ぶことの意味を問う学生も見られた。ある学生は、単位を取得するという意味では、遠隔授業を受講することに精神的な負担はないが、遠隔授業では内容が乏しいと感じている。学生は、遠隔授業を反面教師として、大学教育の本質は「人間が対面で行うべきもの」との考えに至っている。

単位を取得することに重点を置くならば、課題さえ提出できればよいので、個人的に遠隔授業は楽だと思います。私は大学で人と話すことがあまりないし、元々一人でも平気な性格なため、人とコミュニケーションが取れないからといって辛いとも思わないし、人と関わる精神的負担が軽減された点については良かったと感じています。ですが、今年大学で何を学んだのが、人に聞かれても上手く答えることができないと思います。知識が身についた自覚はなく、単位のために課題を提出し続けたような感覚です。教員の中には、授業と言えるのか分からないような、質の低い授業を提供してくださる方がいらっしゃいました。大学生なのだから、勉強は自分でやれと言われていたような気がして辛かったです。この点については、大学は大学としての機能を果たしているのか、疑問に思うこともありました。本当に学ぼうとするならば、教育はやはり、人間が対面で行うべきものだと思っていました。(ID2)

一方、遠隔授業について、受講場所を選ばないことや通学に係る時間的、経済的負担がないことをメリットと感じている学生も見られた（22件）。

遠隔講義と対面講義の最も顕著な相違点は、受講場所を受講者自身が選べるという点である。これによって、決められた開講場所に向かうために費やしていた交通費、時間が削減できる。私の場合は自宅から大学まで自転車で片道10分、公共交通機関で移動する場合は路面電車を使用するため160円が必要だが、自宅を受講できたためそれらを家事や軽食などに利用することができた。また外出するためには、身だしなみを整えたり講義に必要なものを準備したりする必要があるが、それらも最小限で済む。これら種々の作業や時間、金銭を節約できることは合理的であるだけでなく心理的余裕にもつながり、昨年と比べて学習時間が飛躍的に伸びた。具体的には、一週間における講義に直接関係のない学習時間が8時間ほど向上した。(ID4)

愛媛大学法文学部ではインターネット会議サービスである Zoom 等を用いた同期型の遠隔授業と、学修支援システムによるメールや大学向け学習システム Moodle3.5 を用いた非同期型の遠隔授業を提供したが、それぞれの授業形態のメリットを述べている学生もいた。同期型であれば、直接教員に質問することができることをあげるが、一方でパソコンで顔を映し出さずに受講できることもメリットとして評価していることには、留意が必要である。非同期型の授業では、提供された教材の動画を理解できるまで視聴できることを、メリットとしてあげる。また、受講時間を選ばないこともメリットとして挙げている。なお、その結果アルバイトが可能になったとの内容にも留意が必要であろう。

Zoom を用いた同期型授業のメリットは、カメラをオフにして参加することが出来たため、先生に当てられた時も対面授業の時ほど緊張せずに発言することが出来る事だと感じた。私は発表が苦手なため、カメラオフによって安心して授業に参加することが出来た。特に、大学に入ってから初めて学習する基礎朝鮮語の授業は、不安が大きかった分、カメラをオフにして取り組める点はとても心強かった。また、先生に対して質問があった時は個別にチャットを送ることも出来るため、その点もよいと感じた。

……

Moodle を用いた非同期型授業のメリットは効率よく学習に取り組むことが出来る点だ。期限内なら何度も視聴することが出来るため、一回見ただけだと理解できなかった所を繰り返し視聴することで理解につなげることが出来た。特に、私は1回生だから共通教育の授業が多かったのだが、苦手な理系科目の授業の時は計算の過程やグラフの作成方法などを確認しやすくて助かった。また、自分の都合のいい時間に取り組むことが出来る点もメリットとして挙げられる。これにより、アルバイトにも時間を割くことが出来るため、一人暮らしをしている自分にとっては助かった。(ID11)

遠隔授業のデメリットの中には、「環境・必需品に不備がでた (10件)」という記述もあった。先行研究 (錦織2020) によれば、「コロナ禍における学修弱者への支援な

しに、そして場合によっては教育者の自己アピールのためにオンライン教育を展開することは、教育に似て教育に非ず、パワー・ハラメントにすらなる可能性もある」と、批判しているが、今回の手記の中にも、下記のようにオンライン授業の受講に必要な通信環境の整備が整っていないため苦労した記述が目立った。

遠隔授業実施の発表が物凄く急だったので、スペックの低いパソコンを使っている自分にとっては授業を受ける際に苦に感じることも多々ありました。それこそ家の Wi-Fi 環境だってそこまで良いものではないし、ヘッドセットやカメラも持ち合わせていなかったため、自分で調達してなんとかやりくりしたのを覚えています。(ID3)

同期型で大変だったのは ZOOM で熱くなりがちなパソコンの処理落ちだった。扇風機の風を当てたり iPhone に変えたりと快適な環境を探した。非同期型では課題や講義を忘れないようにスマホのリマインダーを活用した。(ID14)

また筆者らが2020年10~12月に実施したアンケート調査の結果でも、遠隔授業を受ける際の障害を聞いたところ、63.7%の学生は「障害になることはなかった」としつつ、残りの学生は、自宅の通信環境が悪い、PC等の性能が低い、1人になれる環境がない、操作方法が分からない、自分のPCが無い等、オンライン授業に対して不具合を感じていた結果がでた。

特に1回生は、以下のように辛かった内容の記述が多く目立った。

僕の授業はすべて遠隔授業でした。僕に限らず、かなりの数の大学生は大学に入ってからパソコンを本格的に触ると思うのですが、全然触ったことの無いパソコンを使って授業を行うのはものすごくつらかったです。さらに、操作を一つ間違えただけで課題を不十分な状態で提出してしまったことが何度もあり、そのほとんどは修正が効かないものだったので成績も全然ダメな評価しか取ることが出来ませんでした。対面だったら成績はもっと良かったのだろうと思いました。(ID7)

さらに慣れないオンライン就活をしながらの4回生も、長い時間PC等の画面を見ることによって体調や心身のバランスを崩しているとみられる記載があった。

就活のメールにさらに大学の講義ごとのメールが重なり、メールを開くことが憂鬱で仕方なくなる。いつも新着メールの数字におびえていた。授業はオンラインのため、90分パソコンを見続けることがしんどかった。目のピントが合わない状態が続いたので目薬とブルーライトカットの眼鏡を買った。7月頃からは許されるものはすべて自分のカメラをオフにして受講するようになる。(ID5)

今回、手記を寄せてくれた学生たちは、工夫をすることでなんとか乗り切っていたが、学生が解決するだけの問題とせず、今後は大学や教職員による「オンライン学修弱者」への配慮が不可欠であろう。

2) 「日常生活」に関する内容分析

「日常生活」に関する記述では、最も記述が多かった「行動面」(55件)のうちでも、感染対策をするようになった変化について検討していきたい。コロナ禍で必要とされた「感染対策」のうち、感染対策グッズの入手困難に、苦労した記述がみられた(9件)。入手困難だけでなく、マスクの着用をめぐって他人の目を気にしながら過ごす不安な様子が見られる。

買い物でもアルバイトでもマスクの着用とアルコールによる消毒が必須になり、気づけばその両方が入手困難になっていました。衛生面ではよくないと思いつつも、周りの人の目が怖いので、安心と安全の違いをひしひしと感じながら手持ちの不織布マスクを使いまわしました。(ID18)

「経済面」(27件)と「体調面」(21件)では、主に心配な点が書かれていた。「経済面」では、アルバイトも不本意にシフトを減らされ、食事や生活全般、切り詰めていた様子が見え(21件)。また、保護者の収入の減少、あるいは自ら学費を支払っている学生は自身のアルバイト収入の減少等で、不安な状況になっていた。

自分のアルバイト含め、家族全体の収入が激減したのはもちろんのこと、それによって生活が顕著に変わったように思います。それまではミールカードで自由に食事が取れていましたが、そもそも学校に行かなくなったので家で食べることが圧倒的に多くなり、そしてその食事も非常に質素なもので、冷凍食品1つだけということも当たり前でした。自分の家庭は全くもって裕福ではないので、様々なところを切り詰めて生活していたように思います。(ID3)

私は学費を自分で払うために、高校卒業と同時にアルバイトの面接を受けに行き採用をもらうことができ四月から働く予定だった。しかし採用取り消しとまではならなかったが、いつから働くことができるか分からない状況でバイト開始を待つことになった。七月になっても始まらず、学費が払えないと思い急いでバイトを探し始めた。そして今のバイト先を紹介してもらうことができ、学費も払うことができた。

……

妹が今年受験ということもあり、入学金や授業料が支払えないかもしれないからと両親と話し合いを何度もして進路を考えていた姿を見ることはとてもしんどかった。(ID8)

「体調面 (21件)」では、「不調 (17件)」の記述が多く、長引くコロナ禍で、2020年4月ごろの緊急事態宣言下の自粛生活から、5月になり宣言解除された(第一波)後に、外出やアルバイトを開始し、頑張りすぎてしまう様子や、環境が変わる中で、身体と心がついていけない状況が見られた。なお、「昼間の飲酒」にも言及されていることには注意を要する。一般に、コロナ禍での精神的な不安等からアルコール依存に陥る危険性も指摘されており、学生指導上、十分な注意が必要と思われる。

5月末ごろからバイトが再開し、さらにもう一つの店舗もオープンし、合計三店舗それぞれ違う飲食店でアルバイトをすることになる。外に出られることと他人に頼られることが久しぶりで喜びのあまりアルバイトをしすぎて体調不良になる。人生で初めて心療内科を受診する。家族や友達には言わなかった。アルバイトは唯一正当な理由で人と対面で関わることのできる機会であったため、もしアルバイトが無かったとしたらもっと精神的に辛かったと思う。4月から2、3か月の間に昼に一人でお酒を飲んだことが2、3回あった。(ID5)

また、1回生では、慣れない土地での初めての一人暮らしをしながら、学業との両立の難しさを吐露する者も見られた。2020年4月に最初の緊急事態宣言が出された当時は、全面的に遠隔授業が行われ、その期間は帰省した学生も多かった。以下のように、第2クォーター(6月11日～)から一人で生活をしながら、遠隔授業を継続することが困難だった様子が見られた。

第2クォーターに合わせて愛媛に戻ることにした。しかし、日常生活と学業の両立は容易なことではなかった。それは朝昼晩の食事を用意しながらレポートを書くということを甘く見ていたことに起因していた。第2クォーターになると晦渋な文献や資料を読んでレポートを書く授業が急増し、さらに、書き慣れないレポートに対する修正点を明記せずにあまり思わしくない評価を送られることがあったこともあり、私の精神は混乱した。その中でも自分で自分の食事の面倒を見なければならない。この混迷した生活を寂寞たるマンションの一室で齷齪と送っていた。(ID13)

「経済面」では、収入減少による生活苦に陥ったことが多かった(21件)が、なかには衛生面をはじめとして生活を振り返る契機とし、コロナ禍の経験を今後の糧にしようと前向きな気持ちを記述した者もいた。

コロナの影響で親からの仕送りに変化があり、お金が必要になったのでアルバイトを始めようと思ってでも雇ってくれないということがあった。結果的にアルバイトをせず、親からの仕送りのみで生活することになったが、内訳は食費がほとんどで、自分の趣味や日用品などはほとんど買えなかった。しかし、そのような生活を続けながらも良い点もあった。1つは無駄遣いをやめたことである。コロナ禍の前は自炊よりも外食で済ませることが多く、また訳もなくコンビニを利用することが多かったが、コロナ禍でお金の大切さを知り、自炊中心を心がけ、節約するようになった。加えて、感染症対策をしっかりと行うようになった。コロナ禍になる前は手洗いうがいを行わず、マスクも使用していなかったが、コロナの影響で手洗いうがいに加えて消毒をするようになり、マスクも絶対つける生活に変わった。この2つはコロナ禍でなくとも大切なことなので、身につけることができたら〔ママ〕良かったと思う。(ID17)

特筆すべきは、1回生の「友人関係」についての記述である。多くが「自分だけ友達ができているのではないか」といった不安や孤独な気持ちを吐露している。実際に友達がいないことの不安とともに、他の人と比べることにより、社会生活から疎外されている心境になっている不安がうかがわれる。1回生の場合は、通常でも、大学入学を機に、生活上の変化に適應することが成長課題であるが、多くは友人を持ちながら体験を重ねることで克服していく。コロナ禍では、友人を作ることや大学生活上での実経験を蓄積することが困難であったことがわかる。

第1クオーターは1人も友達ができなかった。特にその時期に Twitter や Instagram を見ていると、SNS 上のつながりから実際に会って友人をつくったり友人関係を広げている人、またはやめにサークルなどの活動団体に所属してそこで友人をつくっている人も何人か見られ、友人が1人もできていない自分とそういった人たちを比べて、この先ちゃんと友人ができるのがとても心配になった。また、自分が把握していないだけで他にも友人同士のグループができているのかもしれない、と思うと、「対面で勉強がしたいという気持ち」と「友人ができず悲しい思いをするなら対面でなくてもいいという気持ち」の両方があった。(ID15)

3) 「その他」に関する内容分析

「学生の気持ち」カテゴリでは、1回生と上回生で分かれる記述となった。

今後の抱負（7件）やメリット（7件）に関しては、上回生の記述が多かったが、デメリット（10件）は1回生の記述が多かった。デメリットの例として、自粛生活において SNS 等のネットニュースを見る機会が多くなることで、コロナウイルス感染拡大前のようなキャンパスライフはもう送れないのではないかと漠然とした不安を感じているようだった。

SNS では社会における大学生の扱いについての議論が活発化していたが、コロナの感染状況の悪化により今までの大学生生活との截然たる差を埋めるまでには至らなかった。むしろ、私はこういった議論を見たことにより、今の学生生活とコロナ前の学生生活との間に大なる逕庭があるのだと再認識してしまい、送ったこともないのに抱いてしまっている理想の大学生活が送れないまま4年経ってしまうのではないかと不安を感じてしまう結果となった。(ID13)

今後の抱負（7件）としては、2回生の夏休みに行く予定だった留学が行けなくなったが、海外渡航できるようになる日に向けて、日々、語学学習を続けているという以下のような抱負を述べている。

就職活動までに一度は留学するという自身の目標が崩れ去った今、自分はいつか海外渡航できることを夢見て毎日語学に取り組んでいます。おそらく当面の間は自粛することになるとは思いますが、それまでは日々努力を積み重ね、英語はもちろんのことフランス語も流暢に喋れるようになるという理想の自分を描きつつ、モチベーションを維持し続けていきたいです。(ID3)

また、2回生以上では夏季休業中に行われる「インターンシップ」や、4回生が行う「就職活動」への記述が多くみられた（18件）。コロナ禍でインターンシップが中止になった記述が多く、就活もオンラインでの就活を余儀なくされ戸惑いが見られた。たとえば、「就活」での「学生の気持ち（5件）」は、次のような記述だった。ともに4回生であるが、オンラインでの就職活動に不安を持ちながら試行錯誤しつつ順応しているように進めていたようだ。

インターンシップは3月に7~8社予定していたがすべて中止になったので、就活をどのように進めていいのが全く分からなくなった。就活の面接はすべてがオンラインで行われた。家の中でスーツを着てオンオフをはっきりするのがとても違和感があり疲労感が強かった。会社の場所が県外だったとしても二次面接以上は直接できるのが一番いいと思った。（ID5）

オンラインでの就職活動は大変だった。対面ではなく画面越しなのにこちらのことがきちんと会社の方に伝わっているのか不安だったし、面接中にネットワークが不安定になり繋がらなくなったらどうしようと不安に思うこともあった。就職活動中にコロナウイルスに感染しては人生が終わるとまでかんがえていたので、友達と会うことも控えていた。学校にも行けない状況のなか電話やラインでしか友達とやり取りしておらず、ストレスもたまっていた。唯一良いことといえば、オンラインで完結することにより交通費がかからなかったことだ。そのため、わざわざ遠くに足を運ぶ必要がなく、県外の企業にも目を向けてみたりもした。（ID9）

また、ある学生（2回生）は、2年後に迫っている就活について、状況の変化を受け入れ、新たな方向転換を考え将来を見据えているたくましい姿もうかがえる。

またコロナ禍を経て、自分の将来についてゆっくり考えることができたのもコロナ禍で得られたものの一つだと考える。私は元々、旅行業や航空会社への就職を希望していた。そしてそのための資格の勉強や大学での学びを進めてきていた。しかしコロナウイルスの感染拡大により状況は変わり、私の目指していた航空会社は新卒採用を中止、また旅行会社も大きな打撃を受けた。このような現状を受け、今まで全く視野になかった職種に目を向けるようになった。これまでは視野になかった分、目指していた職種以外について調べ、考えることはなかったが、選択肢を増やすという意味でも様々な職種について知ることになった。その中で自分の興味のある職種も見つかり、今はその新たな夢を叶えるための学びを始めている。（ID16）

6. 今後の課題

本研究は、コロナ禍の学生生活を理解するために、愛媛大学法文学部学生によって書かれた手記を分析したものである。しかし、これら手記は、法文学部全学生のわずかな数に過ぎず、また、時々刻々と変化する状況で、1年間を通じて学生のプロセスや変化を捉えることはできていない。

しかしながら、そうはいつても、コロナ禍でたくましく、またしなやかに、さらに試行錯誤しながら、大学生活を過ごしている学生の経験や思い等の一部を公表できたと自負している。

愛媛大学では2020年度の前期は教員と学生が対面することのないまま終了し、後期も全面的な対面授業にはならないまま2021年度を迎えた。今なおオンラインも併用した授業を行っている（2021年6月時点）。今後、継続的に調査することにより、長期化するコロナ禍における学生の様々な変化も把握していきたい。

謝辞

手記を寄せてくれた法文学部学生の方々ならび手記募集に携わって頂きました法文学部の教員に感謝の意を表します。この研究は、令和2年度法文学部戦略経費、令和3年度法文学部戦略経費、及びJSPS 科研費19K21723の助成金交付により研究が遂行されたものです。

参考文献

- (1) クリップENDORF (1989)『メッセージ分析の技法：「内容分析」への招待』（三上俊治・椎野信雄・橋元良明訳）勁草書房。
- (2) 錦織 宏、西城卓也（2020）「オンライン教育の展開における学修弱者への配慮」、『医学教育』51,309-311.
- (3) 森ウメ子、大橋千栄子（2008）「手記から学ぶ病児の理解—学生の読後感レポートからの分析—」、『大成学院大学紀要』10,121-131.

付録：図A 国内の感染者数 1日ごとの発表数 (NHKまとめ)

